

2016年8月25日

カーナビゲーションについて < I >

～カーナビゲーションの基礎知識とその歩み～

【目次】

ニュースレター発行にあたり	P2
1 カーナビゲーションの基礎知識	P3
2 カーナビゲーションの市場動向	P5
3 カーナビゲーションヒストリー	P6
(1) カーナビゲーション黎明期	
(2) カーナビゲーション発展期	
(3) カーナビゲーション成熟期	
4 オートバックスの歴代カーナビ担当者が選んだ歴史的モデル	P10
5 おわりに	P11

ニュースレター発行にあたり

～カーナビゲーションの基礎知識とその歩み～

今回のニュースレターは、オートバックスグループの主力商品でもあるカーナビゲーション（以下、カーナビ）を取り上げます。

オートバックスがカーナビを取り扱い始めたのは、1990年6月のことでした。あれから26年が経過し、カーメーカー、カーディーラーが販売する純正品と、オートバックスなどが扱う市販品を合わせたカーナビの国内累計出荷台数は、2015年12月末現在で6,908万台（国土交通省調べ）となりました。現在、国内需要は年間500万台ぐらいありますので、今期中には7,400万台程度になる見通しです。

黎明期のカーナビは自車位置を示すGPS（Global Positioning System＝全地球測位システム）の測位可能時間が1日14時間程度に限られるなど、機能も現在のカーナビとは比ぶべくもありませんが、カーナビは多くのドライバーの憧れであり、大きな可能性を秘めたカーエンターテインメント機器でした。

現在、カーナビは単なる道案内の機器にとどまらず、オーディオビジュアル（AV）機器として、またインターネットの通信端末として、さらに最近では人気のドライブレコーダーやカーセキュリティの機能を付加するモデルも登場するなど、日々進化を続けています。

近年ではカーナビを車両に取り付けるオーディオスペースの規格サイズにとらわれない車種専用の大画面モデルも登場、ユーザーにとってはセンターコンソールのデザインの選択肢も広がるという新たな楽しみ方も出てきました。



大画面ナビ「BIG Xプレミアムシリーズ」（アルパイン）

オートバックスグループでは、この26年間で約700万台のカーナビを販売してまいりました。この販売実績は、純正品、市販品を含んだ国内累計出荷台数のほぼ10%を占めています。

「カーナビゲーションについて」は<Ⅰ>、<Ⅱ>の2部構成とします。今回の<Ⅰ>では、カーナビの基礎知識やこの10年間の市場動向のほか、オートバックスグループが取り扱ってきた数々の市販ナビの変遷を紹介します。変遷については市販カーナビを黎明期～発展期～成熟期の3時代に分けて紹介し、その中からカーナビの認知度向上や市場拡大に貢献した歴史的10モデルを厳選、「オートバックスの歴代カーナビ担当者が選んだ歴史的モデル」としてまとめました。

なお、<Ⅱ>ではカーナビの直近の需要動向にスポットを当て、カーナビの選び方や売れ筋の傾向、後部座席用モニター、バックカメラなどの付帯商品に関する情報など、オートバックスならではの視点で関連情報を紹介する予定です。このニュースレターがカーナビの魅力をも再認識、再発見するきっかけになれば幸いです。

株式会社オートバックスセブン
I R・広報部

1 カーナビゲーションの基礎知識

カーナビは、目的地までのルートを地図上に示し、渋滞情報等も考慮しながら到着予想時間を算出し、目的地まで案内する機器です。交差点や高速道路の分岐点に近づくと表示画面が変わり、分割画面になって標識やランドマークなどをモニターに表示します。道案内は音声でも行いますので、ドライバーはそれを聞きながら、目をそらさずに運転することができます。知らない道でもカーナビがあれば、迷いにくくなり、刻々と変化する道路情報や目的地への到着時間を知ることで、精神的に余裕をもって運転することができます。

このようにカーナビは道に詳しいナビゲーターをいつも助手席に乗せているような安心感をドライバーに与えてくれます。道案内はカーナビにまかせ、ドライバーは周囲の状況に注意しながら運転に集中していく。カーナビを利用するメリットはこんなところにあります。

●カーナビのタイプとサイズについて

現在、カーナビは「オーディオ一体型カーナビゲーション（AVナビ）」と「ポータブルナビ」の2つのタイプがあります。AVナビは、カーナビとカーオーディオ、地上デジタルチューナーなどを一体化した高度なマルチメディア機器です。コンソールのオーディオスペースに搭載するため、車室空間との一体感が得られるのが特長です。

AV ナビはオートバックスの全カーエレクトロニクス商品の売り上げの50%以上を占める主力商品で、カーナビ部門の販売金額ではAVナビが75%を占めています。

カーオーディオやAVナビのサイズは、ドイツの工業規格



インパネのオーディオスペースに装着するオーディオ一体型ナビゲーション（AVナビ）。主流は2DINサイズだったが、近年はDINサイズにとらわれない専用タイプも登場



インパネの上部に装着したポータブルナビ

（略称：DIN）に準拠しています。もともとは自動車のオーディオスペースに設置するカーラジオの外寸のサイズ規格として始まったもので、操作パネルの部分が幅（横寸）180 mm × 高さ（縦寸）50 mm を1DIN（ワンディン）、1DINを縦に二つ重ねたサイズ幅（横寸）180 mm × 高さ（縦寸）100 mm を2DIN（ツーディン）と呼びます。

現在、カーナビ、カーオーディオのベーシックサイズとなっているのが2DINモデル（180mm7V型）で、国産、輸入車を含め幅広い車種に対応しています。ただ近年はオリジナルサイズのオーディオスペースを採用した純正ナビや、後付けでも取り付けキットと合わせた車種

専用用品が開発されるなど、DINサイズにとらわれないモデルも登場しています。

AVナビに対して価格がリーズナブルで、取り付け車種を選ばないのがポータブルナビです。取り付け場所はダッシュボードに吸盤などで固定しますので、取り外しも簡単にできるモデルもあります。簡単に脱着できるので別の車に載せかえたり、車外に持ち出して使用することもできます。複雑な配線が不要なことから自動車関連ルートだけでなく、持ち帰りのできるカーナビとして家電店はもちろん、一時期はディスカウントストアやホームセンターでも売られ、カーナビのエントリーモデルとして広く認知されました。

2006年ごろからは、PND（パーソナルまたはポータブル・ナビゲーション・デバイス）というメモリーカードを使った簡易型のカーナビも発売され、人気を博しました。PNDもポータブルナビのひとつと言えます。

●自車位置の測位方法について

カーナビで最も重要な機能は自車位置を示すことです。自車位置を知る仕組みで最も代表的なものが、人工衛星から得られる GPS 測位システムです。同システムはアメリカが軍事目的で打ち上げた約 30 個の GPS 衛星のうち、上空にある数個の衛星からの信号を GPS 受信機で受け取り、現在位置を表示します。民生用途でも使えるよう開放された GPS をカーナビに応用したのが GPS カーナビで、受信機が内蔵されたパソコンやスマートフォン、デジタルカメラ、レーダー探知機なども現在地情報を活用しています。ただ GPS 情報は電波のため、トンネル内や高層ビルの谷間など、電波が届かない場所では測位できません。そのため、現在のカーナビには加速度センサーや、車が曲がったことを検出するジャイロセンサー、タイヤの回転に伴う車速信号などから得られる情報を併用し、GPS を補助する形で自車位置を測位しています。GPS を捕捉するセンサー類は現在の AV ナビには 100%搭載されていますが、ポータブルナビは一部のモデルのみに搭載されています。

●地図データ（記憶メディア）について

カーナビの地図データは、記憶メディアの進化とともに変化してきました。現在販売されているカーナビの地図データの多くは、フラッシュメモリー（SD カード、SSD=ソリッドステートドライブ）に記憶されていますが、カーナビ黎明期のメディアは CD-ROM が主流で、データ量の増加やメディアの進化に伴い DVD-ROM、HDD（ハードディスクドライブ=固定磁気ディスク装置）へと進化していきました。

CD ナビの時代は、地図データの読み込みにかなりの時間を要していましたが、DVD ナビになってからは飛躍的に早まりました。HDD ナビ時代にはメディアの大容量化が進み、地図データのほか、音楽 CD を大量に録音できるモデルが普及しました。2016 年の最新モデルでは、ほとんどの主要製品がフラッシュメモリーに切り替わり、HDD はナビの地図記憶メディアとしての一時代を終えました。

フラッシュメモリーをいち早く採用したのはポータブルナビでした。メモリーカードは DVD や HDD と異なり可動部がないため故障しにくく、振動による誤作動も少ないとされています。データの読み出し速度も HDD より格段に高速で動作します。当初は容量が少なくカーナビではポータブルタイプを中心に用いられていましたが、現在では情報量も HDD ナビなどと比べても遜色なくなりました。

一般社団法人電子情報技術産業協会（JEITA）の 2015 年（1-12 月）の民生用電子機器国内出荷実績によれば、カーナビのソース別ではフラッシュメモリータイプが前年比 6.8%増の 496 万 7,000 台、HDD タイプは同 62.1%減の 30 万台で、フラッシュメモリータイプが大勢を占めています。

●カーナビの販売ルートについて

カーナビはメーカーオプション、ディーラーオプション、市販品の 3 つに分けることができます。メーカーオプションは自動車メーカーの生産工場でのナビを実装するライン装着品です。一方、ディーラーオプションは、車を販売するカーディーラーが販売している商品です。これらは自動車メーカーやディーラーが新車や中古車の関連製品として販売する純正品となります。市販品はオートバックスなどの店舗や EC サイトなどで販売している商品です。純正ナビは車との一体感があり、ステアリングでのリモコン操作や空調操作なども画面でできるというメリットがありますが、カーナビの選択肢が限られてしまうのが難点です。一方、市販ナビは汎用品なので一体感が得られにくいという部分もありますが、最新の機能を搭載したモデルや大型画面のモデル、値ごろ感のあるモデルなど、幅広い選択肢から選べるというメリットがあります。モデルによっては自動車メーカーの純正品のように一体感のあるものも登場しています。

2 カーナビゲーションの市場動向

●新車需要に連動するカーナビ市場。ここ数年はディーラーオプションが攻勢

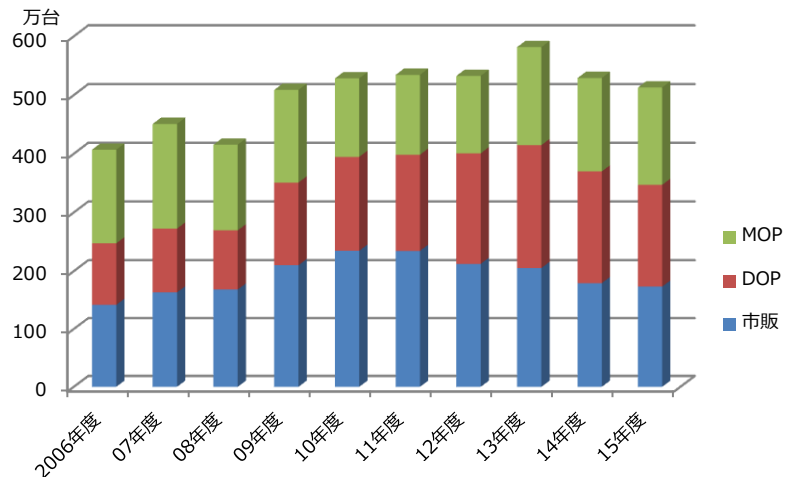
グラフ1は2006年度から2015年度までの過去10年間のカーナビの国内出荷台数とメーカーオプション（MOP）、ディーラーオプション（DOP）、市販の業界推計値です。総出荷台数は2006年度から2008年度まで400万台でしたが、2009年度に初めて500万台を超え、2013年度に582万台となりました。

2010年度以降、カーナビの出荷台数は新車販売台数とほぼ連動しています。消費税引き上げに伴う駆け込み需要の影響で、新車販売台数は過去10年間では2013年度が最も多く、カーナビもこれに準じています。

出荷台数の内訳は、2013年度以降はディーラーオプションがシェアを伸ばしています。2006年度から2009年度まではメーカーオプション、市販品を下回っていましたが、2010年度にはメーカーオプションを、2013年度は市販品も上回りました。

ディーラーオプションに比べシェアを落としているのが市販品です。2010、2011年度がともに234万台で、この時期にピークを迎えましたが、その後はシェアを落とし苦戦が続いています。メーカーオプションについてはあまり大きな変化は見られませんが、カーナビ販売はディーラーオプションが攻勢に出ていることがわかります。ただ2015年度は新車販売が4年ぶりに500万台を下回ったこともあり、ディーラーオプションも低迷を強いられました。同年度のカーナビの総出荷台数は513万台となり、内訳はメーカーオプション166万台、ディーラーオプション174万台、市販品173万台で、三者がほぼ拮抗した状況になっています。

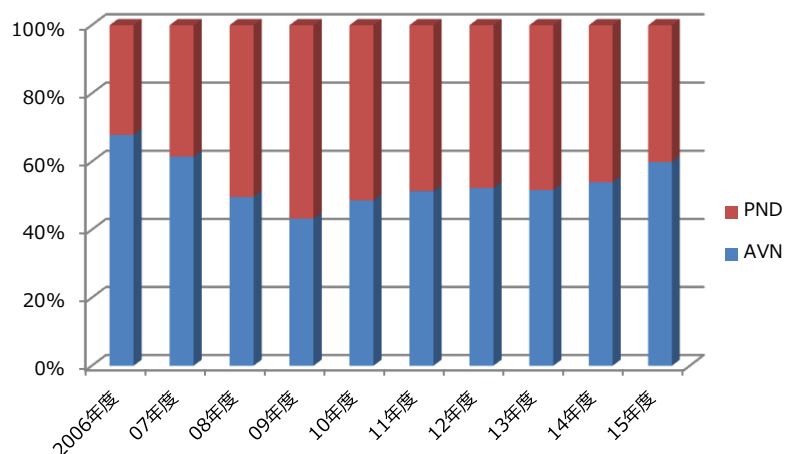
グラフ1 カーナビゲーション国内出荷台数（2006-15年度）



●AVナビ単価はこの10年で9万円減

次にオートボックスグループにおけるこの10年間のカーナビ販売台数の推移も見ていきます。販売台数の構成比ですが、AVナビ（AVN）は2006-07年度まで6割以上を占めていましたが、2008-10年度はポータブルナビ（PND）の構成比が半数以上を占めました。ポータブルナビは2006年ごろ、大手カーナビメーカーからも発売され、カーナビ入門者や年配客の支持を集めました。しかし、2011年度はまたAVナビが徐々に増え、2015年度は再び6割近くをAVナビが占めています。

グラフ2 オートボックスAVナビ・ポータブルナビ販売台数比率

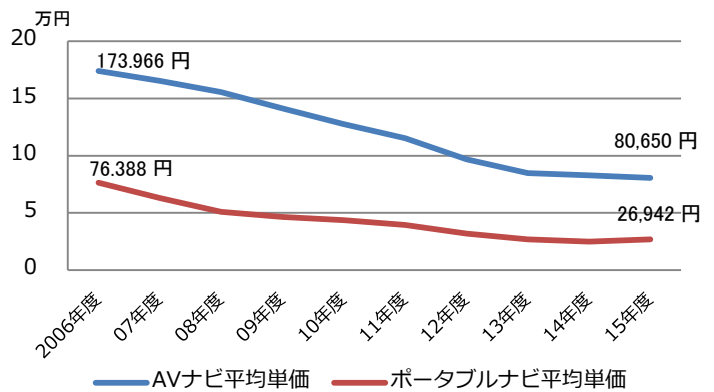


グラフ3は、オートボックスで販売した AV ナビおよびポータブルナビの 2006-15 年度の平均単価の推移を示しています。

AV ナビは、2006 年度には 17 万 3,966 円でしたが、15 年度は 8 万 650 円まで 9 万円以上平均単価が下がり、またポータブルナビも同様に 7 万 6,388 円から 2 万 6,942 円に 5 万円近く下がっています。いずれも下げ幅は半額以上となっています。

平均単価の下落は、値ごろ感を持った製品のラインナップや価格競争、EC サイトの低価格販売も要因のひとつと考えられます。しかし一番の理由はカーナビが多くのユーザーに行きわたり、コモディティ化したことも大きな理由だと思えます。コモディティ化すると「どれを買っても同じ、ならばなるべく安いものを」という意識が働くからです。

グラフ3 オートボックス AV ナビ、ポータブルナビ平均単価の推移



オートボックスセブン調べ

3 カーナビゲーションヒストリー

(1) カーナビゲーション黎明期 (1981~1992 年)

●カーナビゲーションの歴史は 1980 年代初期からスタート

カーナビの歴史は、1981 年にホンダが 2 代目アコードに搭載したジャイロ式カーナビ「ホンダ・エレクトロ・ジャイロケータ」からスタートしました。ホンダに続いたのはマツダのユーノスコスモに搭載した「カーコミュニケーションシステム」で、コントロールユニットは両手で抱えきれないほど大きかったそうです。

1990 年に発売されたのが 9 代目クラウンに搭載された「GPS エレクトロマルチビジョン」。純正ナビは市販ナビよりも先行していましたが、以降は市販品がめざましい進化を遂げました。



カーナビの原点とされる「ホンダ・エレクトロ・ジャイロケータ」

●世界初の市販カーナビ パイオニア カロツツェリア「AVIC-1」

市販ナビの歴史は 1990 年に発売された GPS 方式カーナビ、パイオニアのカロツツェリア サテライトクルージングシステム「AVIC-1」から始まりました。本体価格は 35 万円。別売りのモニターなどを合わせると 70~80 万円もしました。パイオニアによれば、AVIC-1 の販売台数は 2 年間で約 2 万台。オートバックグループでも取り扱いましたが、取り付け時間は丸 2 日間もかかったといいます。現在の AV ナビの取り付け時間は約 90 分ですから、当時の取り付け作業がいかに大変だったかが想像できると思います。



市販ナビ初のモデルは、パイオニアのカロツツェリア サテライトクルージングシステム「AVIC-1」

●カーエレメーカー、家電メーカーなどが相次いで市場参入

パイオニアに次いで、カーエレクトロニクスメーカーの市場参入がスタートしたのは1992年の夏商戦から。ケンウッド、クラリオン、アルパインがそれぞれ市販モデルの第1号機を発表しました。同年は家電メーカーの参入も相次ぎました。口火を切ったのはソニーで、東芝もナビ1号機を発売。翌1993年にはマスプロ電工、三菱電機、住友電工、サンヨー、パナソニックが市場参入を果たしました。ただカーナビ本体とモニターの価格は40~50万円と、一般ユーザーにとってはまだまだ高嶺の花でした。

(2) カーナビゲーション発展期 (1993年~2009年)

●ワンパッケージで20万円台を実現。市場拡大に寄与したソニーの普及価格モデル

市場が一気に拡大しはじめたのは1993年にソニーが発売した「NVX-F10」から。4インチモニターとのワンパッケージで21万円（実勢価格は19万円前後）とそれまでの価格のほぼ半分の価格を実現しました。1994年にはアルパインが市販カーナビ初のオートリルート（ルートを外れた時に自動で目的地へのルートを再設定する）機能を搭載した「NVE-N055」をリリース。翌1995年には全国1,100万件のタウンページに掲載された電話番号での検索やビル内のテナント情報を表示する「NVE-N005V」を追加。N055シリーズはCDナビの代表的モデルとなりました。同年はサンヨーが「Gorilla」シリーズ1号機を発売。以後、同シリーズはTVショッピングなどでも知名度を上げ、ポータブルナビの代名詞的存在となりました。「Gorillaある？」オートバックスの店頭ではこうひと言告げてカーナビを買い求めるお客様が増えました。

●VICS サービススタート。カーナビは電子地図からリアルタイム道路交通情報端末へ

1996年4月、カーナビに渋滞情報を提供するVICSサービス（東京圏）がスタートしました。以降、カーナビは単なる電子地図ではなく、刻々と変化する道路情報を考慮した道案内ができるようになりました。

現在のAVナビはオーディオ、ビジュアル、ナビゲーションを一体化した2DINスタイルが一般的ですが、これを最初に製品化し、頭文字から「AVN」を取って商標登録したのが富士通テンでした。1997年に発売したその最初のモデルが「E7707AVN」で、以降、オーディオ一体型カーナビゲーションはこのスタイルがスタンダードになりました。

1997年は「DVDナビ元年」。業界初のDVDナビ「AVIC-D909」をリリースしたのはパイオニアで、同社の最上位モデル「サイバーナビ」の呼称はこのモデルからスタートしました。

1997年度はカーナビの国内出荷台数が初めて100万台を突破しました。しかし、当時のカーナビユーザーはまだ車にこだわりのある人たちが中心で、パイオニアでは一般の人たちにもカーナビを知ってもらいたいという思いから「操作が楽」「楽しくドライブできる」というコンセプトを掲げ、1998年に初代の楽ナビ「AVIC-500」をリリースしました。

●HDDの採用で音楽記憶機器としての魅力も備わったカーナビ

2001年はパイオニアがHDDを採用したサイバーナビ「AVIC-H09」を発売しました。容量は10GBで、DVDの4倍のデータ量がありました。音楽CDをHDDに録音できる「ミュージックサーバー」は、以降の高機能カーナビの方向性を決定づけました。同年10月、パイオニアはそれまでのカーナビの価格帯を見直したDVD楽ナビ「AVIC-DR2000」（15万8,000円）を発売。これもヒットモデルとなり、同社は高機能モデル「サイバーナビ」、普及モデル「楽ナビ」の2シリーズで市販カーナビ市場をけん引しました。2002年

には、ケンウッド、パナソニック、アルパイン、富士通テンが HDD ナビ 1 号機を発売、2004 年にはクラリオンが従来ではスペック的に不可能といわれていた 2 DIN サイズにワイド 7 インチモニターを搭載した 7 型 AV カーナビ「MAX940HD」を発表。同年、DVD ナビと HDD ナビの出荷比率はほぼ半々となり、AV ナビは 2DIN タイプが主流となりました。

●カーナビ買い替えのきっかけとなった地上デジタル放送

2005 年以降はカーナビに新たな機能を付加したモデルが登場しはじめました。ケンウッドはカーナビとして初となる iPod（携帯型デジタル音楽プレイヤー）と直結し、ディスプレイ上での操作を可能にしたスマートナビ「HDM-555」を、富士通テンは運転席と助手席で同時に違った映像を表示できる「デュアルディスプレイ」機能を搭載した「AVN7905HD」やセンターコンソールのサイズに 1 DIN が多い輸入車ユーザーに向け、AVN 機能を 1DIN サイズに内蔵した HDD ナビ「AVN075HD」を発売しました。

2006 年 4 月にはモバイル向け地上デジタル放送（通称：ワンセグ。フルセグ放送は 03 年 12 月から）がスタート。いち早くワンセグチューナーを内蔵したカーナビを発売したのはサンヨーの「Gorilla」、AV ナビではパナソニックが業界初の地上デジタルチューナーを標準装備した HDD ナビをリリース。以降、カーナビは地上デジタルチューナーを標準装備したモデルがスタンダードとなりました。

当時、地上デジタルチューナーを装備しないカーナビユーザーが地上デジタル放送を視聴するには別売りの地上デジタルチューナーを購入するか、チューナーを内蔵した最新のカーナビに買い替えなければなりません。しかし、発売当初の地上デジタルチューナーは 8 万～10 万円と高価だったため、チューナー内蔵のカーナビへの買い替えが進みました。オートバックスグループのカーナビ販売台数は取り扱いを開始以来、右肩上がり続けてきましたが、2010 年度に初めて前年実績を下回りました。

(3) カーナビゲーション成熟期（2010 年～）

●2 DIN 規格に収まらない車種専用モデルが登場

2010 年のカーナビ市場の話題をさらったのはアルパイン。同社は市販ナビでは初となる 8 型モニターを搭載した BIG X ナビ「VIE-X008」を発売しました。それまでカーナビ各社は 2 DIN 規格に合わせて AV ナビを開発していましたが、アルパインは 2 DIN 規格に収まらない大型モニターを搭載するため、プリウス（30 系）やミニバンなどに車種を絞って専用の取り付けキットを開発。純正ナビと変わらぬ装着感を持つ同モデルは、多くのユーザーの支持を得ました。

2011 年のカーAV 関連市場を取り巻く大きな出来事は、7 月のアナログ TV 放送の停波でした。地上デジタル放送への完全移行は家庭用テレビを販売する家電店同様、オートバックスグループ各店でも特需となり、2011 年度のカーナビ部門は過去最高の販売台数を記録しました。しかし 2012 年からはその反動もあり、再び前年実績を下回る状況が続いています。

カーナビもここまで普及が進むと「カーナビはどのメーカーのものを選んで同じ」という意識が生まれます。コモディティ化した商品が次に陥るのは価格競争です。カーナビメーカーがコモディティ化を食い止めるには、新機能や付加価値の訴求が課題になりました。

2011 年、パイオニアはフロントガラス越しの実写映像にナビ情報を表示する「AR（拡張現実）スカウターモード」を搭載したサイバーナビを開発、翌年には AR 情報をフロントガラス前方に表示できる AR HUD（ヘッドアップディスプレイ）ユニットを搭載するなど先進機能の開発に取り組みました。

2012年、ケンウッドは美しく高精細な地図描画やAV画面表示を可能とするとともに、高速レスポンスによる高度なナビ性能と快適な操作性を実現した「彩速ナビ」の1号機をリリース、数モデルを経て、2015年には市販ナビ業界初のハイレゾリューションオーディオ音源対応ナビ「MDV-Z702」を発売しました。

三菱電機は2012年より「音」を差別化戦略として高音質へのこだわりを追求したハイエンドオーディオ&カーナビゲーションシステム「DIATONE サウンドナビ」シリーズをリリース。以来、カーエレクトロニクスメーカー各社は車内音質の向上というニーズに着目し、高音質ナビ市場に参入しました。



三菱電機 DIATONE サウンドナビ NR-MZ100PREMI (左) と NR-MZ100

●高品質、大画面化を競う 2016 年の注目モデル

2016年の夏商戦で注目を集めているのは、パナソニックのストラダ「CN-F1D」。コンソールの手前に突き出る「フローティング構造」の採用で、9インチ大画面ディスプレイを装着できるモデルです。一部ハザードランプのスイッチに干渉してしまう車は適合車種から外していますが、車種別専用パネルを使用せずに多くの車種で大画面ナビが使えるのは目からウロコのアイデアです。取り付け可能車種は2016年8月23日現在180車種となっています。



フローティング構造の採用で大型画面の取り付けを可能にしたパナソニック「CN-F1D」



パイオニアの新サイバーナビ「AVIC-CL900-M」

パイオニアはサイバーナビを5年ぶりにフルモデルチェンジ。新サイバーナビ「AVIC-CL900-M」で注目したいのは9月発売のマルチドライブアシストユニットです。前方車両の接近警告や走行レーンからの逸脱警告、ドライブレコーダーなど安全面のサポート機能のほか、車上荒らしなど車の異常を検知すると自動的に動画と静止画を撮影、指定した携帯電話にメールで通知するセキュリティ機能も搭載しています。

●“アイズフリー”でスマートフォンを操作する CarPlay、Android Auto

今後、カーナビ業界に大きな影響を与えそうなのが、アップルとグーグルです。2014年3月、アップルはiPhoneとカーナビを統合した「CarPlay」を、同年6月、グーグルはAndroidとカーナビを統合した「Android Auto」を発表しました。CarPlayやAndroid Autoは、車内でスマートフォンのアプリケーションを安全に操作できるようにしたもので、音声コマンドにより、ハンズフリーやアイズフリーで音楽、電話、メールなどの操作ができるようになります。たとえば運転中にメールが着信した際、CarPlayやAndroid Autoを搭載した車であれば、メール内容を音声で読み上げ、返答すれば、それを文字にして返信します。ちなみにCarPlayは2016年8月現在、輸入車を中心に100車種以上への搭載を発表していますが、国産車はホンダ3車種、三菱4車種、日産1車種、スバル1車種、スズキ4車種が含まれています。アップルとグーグルによる自動車業界への進出で、既存のカーナビ業界は少なからず影響を受けられると思われませんが、日本のカーナビメーカーには、スマートフォンのアプリでは実現できない車載に適したノウハウをたくさん持っています。カーナビの進歩は未来の車社会にも大きな役割を果たしていくものと思われま

4 オートボックスの歴代カーナビ担当者が選んだ歴史的モデル（発売順）



●パイオニア カロツツェリア AVIC-1

1990年6月発売。世界初の市販GPSナビゲーション。セット価格は70~80万円。市販カーナビの歴史はこのモデルから始まった。「道は星に聞く」という名コピーはいまでも語り草になっている。



●ソニー NVX-F10

1993年6月発売。ナビやモニターをワンパッケージにし、持ち帰りできるようにしたモデル。実勢価格では20万円を切る価格設定で大ヒットした。



●住友電気工業 クルーズメイト SNV-3100

1993年11月発売の住友電工初の市販カーナビ。自動ルート探索、ジャイロと車速パルスを使用するハイブリッド方式といった今日では常識となった機能をいち早く搭載し、カーナビの完成度、実用性を大いに高めた。



●アルパイン NVE-N055 シリーズ

1994年10月発売のCD-ROMカーナビ。GPSとジャイロセンサー、車速センサー、さらにマップマッチングの採用で高精度な測位を実現。市販カーナビとして初のオートリルート機能を搭載した大ヒットモデル。



●富士通テン イクリプス E7707AVN

1997年7月の発売。「オーディオ」「ビジュアル」「ナビゲーション」をダウンサイジングによって一つの製品「AVN」にした市販業界初のモデル。当時のカーナビは本体とハイダウェイユニットとオンダッシュタイプのモニターのセットが主流であったが、同モデルの登場からAVNというスタイルがカーナビのスタンダードとなった。



●パイオニア カロツツェリア AVIC-D909 シリーズ

DVDカーナビ元年と言われた1997年に発売された業界初のDVDカーナビ。新開発3Dハイブリッドセンサーにより高速道路と一般道の重なり時などにも高い精度を実現。同社のカーナビの最上級モデル「サイバーナビ」と呼ばれ始めた一号機。



●パナソニック CN-DV2000D

1998年5月の発売。3Dバーチャルシティマップを搭載した1DIN化したDVDカーナビ。シリーズ10万台を達成した大ヒットモデル。



●パイオニア カロツツェリア AVIC-DR2000 シリーズ

2001年10月発売のDVD楽ナビ。希望小売価格は15万8,000円と、それまでのカーナビの価格帯を大きく見直した。ハイクオリティで使いやすく、しかもリーズナブルと三拍子を追求した同モデルは大ヒットし、カーナビの普及にも貢献した。



●アルパイン BIG X VIE-X088

2010年6月発売のHDDカーナビ。7型より1.43倍大きい8型ワイドVGA液晶を搭載するため、周辺のパネルや取り付け金具、配線部品などを車種専用設計し、純正ナビと遜色ない仕上げを実現。以後、センターコンソールのサイズにとられない、大型画面化の流れを作った。



●JVCケンウッド 彩速ナビ MDV-Z702

2015年6月発売。192kHz/24bitソースの再生を可能にした四代目彩速ナビゲーションの最上位「Type Z」シリーズ。マスター音源に迫るリアルな楽曲再生を実現した業界初のハイレゾリューション（高解像度の意味）音源対応カーナビ。

5 おわりに

市販のカーナビはすでに26年の歴史があります。その間、カーエレクトロニクスメーカーは、多くのドライバーのニーズに応えるため、さまざまなアイデアを駆使して製品化し、現在に至っています。オートバックスグループはその魅力をお伝えするため、お客様からのご質問や要望をうかがいながら、お客様に見合った一台をご提案しています。

最新の機能を搭載した高級ナビから、基本的な機能を備えたリーズナブルなモデルなど市販ナビには多くのモデルがあります。ぜひ店頭をのぞいていただき、最新のカーナビに触れて、その魅力をご体験ください。700万台のカーナビを販売、取り付けた実績を通じてどんな些細なことでもお答えしたいと思います。

この件に関するお問い合わせ先

【お客様からのお問い合わせ】

オートバックスお客様相談センターフリーコール：0120-454-771

受付時間：平日9:00～12:00 13:00～17:30

【報道関係者からのお問い合わせ】

株式会社 オートバックスセブン IR・広報部 鈴木（すずき）、貴堂（きどう）

〒135-8717 東京都江東区豊洲5-6-52 NBF 豊洲キャナルフロント

TEL. 03-6219-8787 FAX. 03-6219-8762

※画像等につきましては、ホームページよりダウンロードできます。 URL: <http://www.autobacs.co.jp/ja/news/newsletter.php>